

●論文

作家・哲学者にとってスタイルとは —— ジャン＝ポール・サルトルの文体 論をめぐって

澤田 直

目次

はじめに

一 初期文芸評論

二 フローベールへの関心

三 『家の馬鹿息子』の文体論

四 思考と言語の矛盾的關係

おわりに

キーワード

ジャン＝ポール・サルトル (Jean-Paul Sartre, 1905-1980)

ギュスターヴ・フローベール (Gustave Flaubert, 1821-1880)

文体 (style; style)

評伝 (biographie; biography)

文学 (littérature; literature)

Qu'est-ce que le style pour un écrivain philosophe?: le cas de Jean-Paul Sartre
What is the Style for a Novelist-Philosopher?: The Case of Jean-Paul Sartre
par/by NAO SAWADA

スタイルとは普遍的な人間の必然性の表現である。これは文章のスタイルにも建築のスタイルにも（そして他のすべてのスタイルに）当てはまる。

スタイルとは永遠の相の下で見られた普遍的必然性である。

ルードヴィッヒ・ウィトゲンシュタイン¹⁾

はじめに

作家の場合、文体（style）の問題が重要なテーマであることは改めて確認するまでもない。画家のスタイルが主題以上にその特異性を表すように、作家の場合もスタイルを抜きにしてはその固有性は語り得ない。一方、哲学の場合、文体は長いあいだほとんど問題にされることすらなかったと言える。科学論文が事実の客観的記述を目指すように、哲学論文もまた真理を反映すればよいと思われてきたためである。しかしながら、ニーチェ以降、哲学においてもスタイルの問題は少しずつクローズアップされてきた。この事実、20世紀以降の哲学・思想の立ち位置を忠実に反映している。じっさい、現代思想の多くはそれぞれ固有な文体によって表明されているのみならず、スタイルに関する考察も頻繁に行われているのだ。

本論では、作家であるとともに哲学者でもあるサルトルにおける文体について考えてみようと思う。そうはいっても、サルトル自身の文体そのものを考察の対象とするのではなく、むしろサルトルが文体に関してどのような考えを持っていたのかを概観して、それからサルトルの実践そのものとその文体観が合致していない事実を示してみたいのである。

サルトルと言え、まずはアンガジュマンの文学ということが思い浮かぶであろう。その理論的表明とも言うべき『文学とは何か』の提言を文学史の常識としてまとめれば、およそ次のようなものになる。すなわち、詩と散文は二つのまったく別の領域であり、詩が、絵画や音楽と同様、対象＝物（objet）として、固有の形式と内容を持つものに対して、散文の使命は何よりも意味に関わ

1) 『ウィトゲンシュタイン哲学宗教日記』講談社、2005年、p.36。

る。その場合、言葉はオブジェではなく、対象=物を指し示すのである。その意味で、散文において文体はあまり意味がないという結論に達することは当然と言えよう。

じっさい、『文学とは何か』のなかの文体に関する記述はそのような方向性を示している。それぞれの作家に固有な書き方があるとした上で、サルトルは述べる。

文体は、もちろん、散文の価値にちがいない。しかし文体は気づかれずに過ぎさるようなものでなければならない。言葉は透明であり、視線は言葉を横切るのであるから、そのなかにすりガラスを滑りこませることは、ばかげていよう²⁾。

つまり、文体は必要ではあるが、できる限り透明でなければならないというのである。重要なのはあくまでも内容であって形式ではない。内容によって形式は左右されるかもしれないが、それが決定的な要因とはならない、とサルトルは考え、「特定の主題が特定の文体を示唆することは事実だが、文体を決定するということはない³⁾」と断言するのである。

かくして、アンガジュマン理論が前面に出ると、文体の問題は背景に退いてしまうように見える。散文において重要なのは、メッセージであって、形式ではないからだ。いや、より正確に言えば、形式の問題は事後的にしか現れない。したがって、『文学とは何か』の議論を文字通り受け止めれば、サルトルは文体など単に二次的なものとしてしか、受け取っていなかったように思われてもしかたがないし、じっさい、サルトルの文学論をそのような観点から批判するものも少なくない。

しかし、事実は必ずしもそうではない。サルトルはごく初期から、晩年に至

2) 『文学とは何か』(加藤周一/白井健三郎/海老坂武訳)、人文書院、1998年、p.31。以下の引用では既訳を用いながらも、本論との関係で若干の変更を施してある場合があることをお断りする。

3) 同書、p.32

るまで、さまざまな形で文体の問題に言及してきたのである。以下に私たちは、サルトルがどのように文体の問題を考えてきたかを、評論と評伝、とりわけフローベール論を中心に見ることにしたい。『家の馬鹿息子』を中心に据える理由はいくつかある。ひとつは、この最晩年の著作は、一連の評伝の頂点に位置するものであり、まさにそこで文体が重視されているからである。第二は、第一の理由と相反するよう見えかねないが、その際に問題となるのが、文体そのものというよりは、作家の文体の背後にある人間性ないしは社会性であるという特異性である。つまり、サルトルにおいては、文体の問題は彼が「実存的精神分析」と名づけた人間理解の問題と密接につながっているのである。その意味で、サルトルは、「文（体）は人なり（Le style est l'homme même）」というフランスの自然博物学者ビュフォンの人口に膾炙した定言をそのまま、自らの論考に当てはめているようにも見える。だが、まずはサルトルの初期文芸評論を見てみよう。

一 初期文芸評論

一九三八年、サルトルは『嘔吐』によって新進気鋭の作家として注目を浴びるとともに、出版もののガリマール社の方針もあって、NRF 誌で評論家としての活動を始める。誌上に発表された文芸評論は後に『シチュアション I』としてまとめられ、上梓されることになるのだが、戦前から戦後すぐにかけての時期に書かれたこれらの作家・作品論においては、必ずといってよいほど、作家固有の文体への言及が見られる。その最初は、1938 年 2 月に発表された、アメリカの作家ウィリアム・フォークナーの小説『サートリス』を論じた評論であり、サルトルはフォークナーの文体の効果を次のように指摘している。

フォークナーの饒舌、その説教者ふうの抽象的な、荘厳な神人同形同性論的文体、これまたたまやかしものだ。文体が日常の動作を粘つかせ、重々しく、叙事詩の壮大さをおしかぶせ、そのうえでそれらをまるで鉛の

犬ころのように沈没させる。⁴⁾

続いて8月に発表されたドス・パソス論では小説 (roman) と物語 (récit) の区別をめぐり、時制の問題からこの作家の特徴を考察するという意味で全面的に文体論であるが、具体的な言及のくだりを引いておこう。

ドス・パソスは彼の諸人物の言葉をすべて新聞記事流の宣言の文体で伝えている。同時に、言葉は思考から切り取られ、純粹な言葉、行動心理学派流に、ありのままに記録すべき単なる反応となる⁵⁾。

11月には親友ポール・ニザンの小説『陰謀』を論じているが、この短い評論の結びの部分もまた文体への言及によって閉じられている。

これらのつまらぬ人物たちの背後に読者が好んで見出すのは、自分の青春を赦そうとせぬ男ニザンの苦しげな暗い人柄である。乾いて投げやりな、彼の美しい文体である。デカルト風の長い文章 [略] である。またあの演説風の激しさである [略]。これは陰險な、姿を隠した小説家の文体ではなく、戦いの文体なのだ。戦いの武器なのだ⁶⁾。

こうした傾向はその後も変わらない。翌年2月発表のフランソワ・モーリャック論は、まさに小説が神の視線から描かれうるのかをテーマとするものであり、その意味でモーリャックの文体を否定し批判するものであると要約できるだろう。また、戦後になって書かれたものでもこのようなスタンスに基本的な変化は見られない。その最も顕著な例を、カミュを論じた『『異邦人』解説』(1943年2月)に見出すことができるだろう。サルトルはカミュの小説作

4) 『シチュアション I』(伊吹武彦他訳)、人文書院、1978年、p.8-9。

5) 同書、p.18。

6) 同書、p.25

法をカフカとヘミングウエーと比べ、アメリカ作家との文体の血縁関係に注目しながらも、その違いを次のように指摘する。

ヘミングウエーは、一種の呼吸痙攣によってその一句一句が虚無から生まれ出るような、発作的叙述体を有している。すなわち、彼の文体は彼自身だ。これに反して、カミュ氏が別の文体、儀式的文体をもつことを、われわれはすでに知っている。のみならず、『異邦人』においてすら、彼はときに調子を高める。[略]『異邦人』がアメリカ的技法の明らかな痕跡を帯びているにしても、それは、思案のあげくの借り物だ。カミュ氏は、自分に差し出された道具のうち、自分の都合にいちばんかなうと見えたものを選んだわけだ。今後の作品にさらに同じものを用いるかどうかは、疑わしい⁷⁾。

この評論のなかで有名な『異邦人』の時制に関する部分は、この後に続くのであり、ドス・パソス論で展開される時間論なども同様だが、世界観と文体はじつは、サルトルの文芸評論においてはつねに密接に関連づけられて論じられているのだ。

もうひとつだけ例を挙げておくことにしよう。『博物誌』や『にんじん』の作者ジュール・ルナールに関する評論「縛られた男」である。ルナールは俳句を思わせるきわめて簡潔な文体で知られる作家であるが、サルトルはルナールの特徴を次のように評する。

言葉の簡潔は沈黙に最も近い姿を示し、最も無言な文は最大の儉約を行った文であると彼は考えた。生涯、彼は、文体とは短くする技術であると信じた。そしてもっとも簡明な表現が一般に最良の表現であるということとはたしかに真実だ。しかし表明される観念に比較しての話であることを

7) 同書、p. 93~94。

理解しなければならない⁸⁾。

しかし、これまでの論考に見られたような積極面と消極面が同居するような論調とは異なり、ここでは文体はもっぱら否定的に論じられる。

小説において彼の興味を引くのは、〈文体の珍しさ〉である。ところで、小説にそのようなものを求めるのはたしかにおかど違いである。というのは、小説においては、文体は消滅するからである。だがルナールは小説が好きではなかった⁹⁾。

このような発想には『文学とは何か』での文体の透明性に関する記述に通じるものがある。いずれにせよ、ここまでのサルトルの文体に関する記述からいくつかの特徴を読み解くことができる。それはなによりもアメリカ的な簡潔な文体の称揚であり、気取った文体やこねくり回した文体への嫌悪である。ところで、最後のルナール論の発表は1945年のことだが、じつはその原型はすでに戦中にできあがっていた。

二 フローベールへの関心。

1939年9月1日、ドイツがポーランドに侵攻して、第二次世界大戦が勃発すると、サルトルも招集され、アルザス地方にすぐに赴いた。それまで日記をつける習慣のなかったサルトルだが、戦時下の一兵士である自らの状況をつぶさに記録しようと考え、「戦争日記」と表紙に記した小さな手帖に日々の出来事や感想を書き込むことにした。その大半は散逸してしまったが、残った手帖は当時のサルトルの生活を知るだけでなく、戦後へと続く思考形成を知るためにも重要な資料である。

ところで、宣戦こそ布告されたものの、独仏軍はマジノ戦線を挟んで対峙し

8) 同書、p. 256~257。

9) 同書、p. 257~258。

たまま、「奇妙な戦争」と呼ばれた戦闘なき膠着状態が八ヶ月続いた。この期間、サルトルは実弾戦を経験することなく、1940年になってドイツ軍の電撃攻撃によってフランスが敗北し、捕虜となって収容所に送られるまでの間、駐屯地で読書と執筆三昧の日々を送ることになった。この時期の集中的な読書は戦後のサルトルの活発な創作活動を支える貴重な充電期とみなすことができるだろう。

先に述べたルナール論の原型は、手帖 14、1940年3月20日から数日間の記述に見られる。

そこから、小説のなかで彼の関心を惹くのは「文体の珍しさ」だという、あの告白が出てくる。だが、小説に文体の珍しさを捜そうとするのは愚かしいことだとは誰にでもよくわかる。まず、小説にはそれが最も見出しがたいからだ。なぜなら、よき小説のなかでは、文体は物語の背後に隠れているからだ¹⁰⁾。

この指摘がそっくりそのまま先に引用した文につながっていることは明らかであろう。じっさい、文体に関するサルトルの言及が「奇妙な戦争」の時期にしばしば見られるとすれば、それは彼が後に『自由への道』第1巻「分別ざかり」として刊行されることになる小説を執筆中であったこととも関係しているであろう。さらに言えば、自らが日記をつけるのに平行して、多くの作家の日記を読んでいったこととも関係しているであろう。ところで、文体に関する最初の重要な記述が、ボーヴォワール宛の手紙、そして日記に出てくるフローベールに関するものであることは重要である。サルトルはシモーヌ・ド・ボーヴォワールに宛てて（39年12月6日）次のように書いている。

ぼくは『感情教育』を、そのまったくひどい文体に関してメモをとりな

10) 『戦中日記』（海老坂武他訳）、人文書院、1985年、p. 406。

がら読んだ。こんな文章について、あなたはと思う。「それは彼の気質の深みにおり、ほとんど、ものを感じる一般的な方法、存在する一つの新しい様式になった」。ところが、これが、人に巧みな文章家という評判を与えられているこの男が書いていることなのだ。しかも、これはなさけないほど馬鹿馬鹿しい¹¹⁾。

同じ日の日記にも、ほぼ同様の内容が見られる。

ごく稀に息をつけるときに、フローベールの『感情教育』を読んだ。なんとこれは不器用で、不快な小説だろう。会話や描写における様式化とリアリズムとのあいだでのあの絶えざる迷い、なんたる愚かしさであろう。大理石に刻まれた惨めなお話だ。高等派の重苦しい文体をとおしてゾラが透けて見える¹²⁾。

ところで、フローベールの「美しい文体」の何がサルトルにとっては気に障るのだろうか。まず指摘されるのは動詞の使用における無頓着さである。サルトルはフローベールの動詞がきわめて月並みで、冗長だと批判すると同時に、「効果としては最悪の受動態」や、「半過去形のいらだたしい使用」(などを指摘する。つまり、問題はここでは何よりも動詞、および文と文のつながりの問題だと要約できよう。

半過去は毎回、主語と同格の文詞に先立たれていることが注目される。彼の文体の悪癖だ。大理石のように冷たく見える¹³⁾。

サルトルは、それでもフローベールの文章をいくつも手帖に書き写しながら

11) 『女たちへの手紙—1926年~1939年』(朝吹三吉他訳)、人文書院、1985年、p. 206。

12) 『戦中日記』前掲書、p. 119。

13) 同前。

ら、その文体を、「大理石のように重く冷たい」、とか「ノルマンディー風の無骨」などと評する。要は、そのどたどたした重い文体を批判するのだ。たしかに、理想の作家がスタンダールであったサルトルにとって、フローベールの文体は重苦しいものと思えたのも無理はない。シャトブリアンの大仰な文体を批判し、何よりも明晰さを求めたスタンダールは、きわめてフットワークの軽い作家であり、その意味で、フローベールの対極に位置するからである。

ところが、奇妙なことに、サルトル自身の文体はスタンダールとは異なり、どちらかと言えば、フローベールと似ているのである。つまり、回りくどくて、重々しい。軽妙さとはほど遠いものである。これは本人も十分に自覚していたことだ。だとすれば、ここでのフローベール批判には、自己嫌悪に近いものがあるのではなかろうか。

だが、私たちが注目したいのは、このような心理的な要素とは別のこと、すでにこの時点で、サルトルが、文体の問題を作者の歴史的社会的状況と結びつけて分析している点である。サルトルはフローベールの文体の内に作者の選択を見てとっており、これは晩年の『家の馬鹿息子』のモチーフを先取りしているように見える。

フローベールの重要性は、彼の文体が過渡的のものだということにある。ルイ＝フィリップ時代の工業文明と 48 年の社会運動は、人びとに物（機械、道具など）について語る傾向を促していたが、フローベールが自在にしえた文体は、かつて風俗や人間の描写によってゆっくりと形成されたものだった。そこでフローベールは翻訳しようとする。文体の品位を保ちつつ、事物について語らねばならぬ。このようなフローベールの不十分さが、やがてゴンクール兄弟にさまざまな動詞の工夫をさせることになる¹⁴⁾。

14) 同書、p. 120。

サルトルがこの短いくだりで説明しようとしているのは何か。それは一言で言えば、フローベールの文体を生み出した過去の文学観と作家の活動していた時代のあいだの乖離である。『家の馬鹿息子』でサルトルはフローベールの修業時代をその時代背景や家族との関係などともに追っていくことになるが、そのようなアプローチの萌芽が、この指摘にすでに見てとれるのだ。じっさい、サルトルは続けて、こう結論づけている。

結局のところ、フローベールは、ルイ＝フィリップ治下のブルジョワの敵であったが、彼自身がブルジョアであり、彼の芸術は48年の工業の産物である。それは自分たちの文化、自分たちの職業、自分たちが支配する人間や事物、つまり自分たち自身に興味を持つ工業ブルジョアであるが、このブルジョアジーはこれらのものを、ある種の文化的偏執をとおして、古典的形式を通して知ろうとするのだ¹⁵⁾。

つまり、サルトルにとって、文体とは言語の処理方法なのであり、それは作家がどのように社会に挿入されていたかを反映しているのだ。これはなんとも還元主義的なアプローチのようにも見えが、このような発想のもとで、サルトルは『家の馬鹿息子』の第四巻を『ボヴァリー夫人』の文体分析にあてようとしていたのである。

ところで、なぜ別の作家ではなく、他ならぬフローベールの文体分析にサルトルは取り組んだのであろうか。サルトルがフローベールを敬愛していたならともかく、事態はまったく逆で、毛嫌いしていたことをいたるところで表明しているのだから、この選択は余計に奇妙に思われる。晩年になって大部のフローベール論を執筆することになった理由について、サルトルは様々な機会に少しずつ異なる説明をしている。たとえば、『シチュアション IX』に収録されたインタビュー「サルトル、サルトルを語る」ではフローベールを主題にし

15) 同前。

て評伝的研究を書こうとする四つの理由をあげている。それを要約すればほぼ以下になるだろう。まず、それはフローベールが想像界の存在だからである。つまり、リアリズムの父であるフローベールが「想像的な子ども」であったという逆説がサルトルの関心を惹くのである。第二は、この19世紀の作家がサルトル自身とは正反対の存在であるからだとされる（サルトル自身は相違点を強調するのだが、じつはその文体をはじめ、じつは似た点も少なくない）。第三に、『家の馬鹿息子』のモチーフが、初期の研究『イマジネール（想像力の問題）』に連なるからだ、と説明している。じっさい、想像力、想像界（*imaginaire*）というタームは長らくサルトルのテキストから消えていたが、『家の馬鹿息子』にいたって、今一度このモチーフが戻ってくる。そして、最後に、フローベールという作家の分析を通して、1948年の夢想的なブルジョワジーの社会的想像的世界を露わにすることができるからだとされる。

だが、フローベールの特権的な位置はこの一点のみに由来するではあるまい。『存在と無』の実存的精神分析において例に挙げられていたのもまたフローベールであったとすれば、サルトルにはフローベールに固執する理由があるはずだ。ここではその個人的な理由を詮索する余裕はないが、簡潔に指摘すれば、サルトルとフローベールの本質的な類縁性も関わっていることは間違いあるまい。それは、ある種のブルジョワジー子弟にとって想像界とは何か、ということだ。じっさい、想像的なものへの逃亡は、『言葉』の主要なテーマでもあり、サルトル自身も想像界の子どもだった。想像的な世界に捕囚された人間、それが作家であり、フローベールはその代表的存在と言える。その意味ではフローベールの問題は、本人はそうのように明言することはないが、サルトル自身の問題でもあったのだ¹⁶⁾。

いまひとつ付け加えれば、サルトルにとってフローベールの重要性は、近代リアリズムの父とみなされるこの作家によってはじめて、文学が他ならぬ言語

16) この件については、すでに別のところで論じたことがある。以下の論文を参照していただければ、幸いである。Nao Sawada, « Biographie malgré lui: L'Idiot de la famille dans le miroir des Mots », *Recherches & Travaux*, « L'Idiot de la famille de Jean-Paul Sartre, n° 71, Université Stendhal-Grenoble 3, 2008.

の問題、つまり書くことの可能性と不可能性の問題になったという点にある。つまり、現代小説において先鋭化する、〈書くこと〉をめぐる根源的な問いかけへと連なる問題構成の始祖がフローベールにあるからこそフローベールが問題となるのにちがいない。じっさい、サルトルが『家の馬鹿息子』で最初から最後までこだわりつづけるのが、言語の問題に他ならない。じっさい、サルトルは『戦中日記』においても、『家の馬鹿息子』においても、なによりも文体を問題としているのである。ただ違いがあるとすれば、前者においては『感情教育』が対象となっていたのに対して、後者においては『ボヴァリー夫人』が対象となるという点である。以下に、それが具体的にどのように実施されたのかを見ることにしたい。

三 『家の馬鹿息子』の文体論

まずは未完に終わった第4巻から見ていくことにしよう¹⁷⁾。というのも、この巻でサルトルは『ボヴァリー夫人』を全面的に分析する予定であったからである。サルトルが最終的なプランを残していないので、私たちは正確には第四巻がどのようなものになったのかを知ることはできないが、それでも残されたいくつかのプランから、その一章が文体にあてられることになっていたことは見て取れる¹⁸⁾。とはいえ、問題となっているのは広い意味の文体であって、「話者、アイロニー、動詞」などもテーマとしてあげられている。ここでも再び、サルトルは若き日と同じ指摘をしている。

フローベールにおける文体の醜悪さはそっくり、動詞のうちにある¹⁹⁾。

他方、サルトルは『ボヴァリー夫人』と『感情教育』を比較して、前者の斬

17) 未完の草稿は、1988年に出版された校訂版第3巻の付録として出版された。以下の記述はそれに依拠したものである。

18) たとえば、Jean-Paul Sartre, *L'Idiot de la famille*, Gallimard, nouvelle édition, 1988, t. III, pp. 686, 703, 743, 759, 777などを参照のこと。

19) *Ibid.*, 677.

新さが、自由間接話法とアイロニーにあると述べる²⁰⁾。しかし、このような指摘はかなり紋切り型で、時代遅れのものに見える。フローベールの文体に関して1919年におこったチボーデ・プルースト論争は有名なものであり、1970年の時点ですでに解決済みであったように思われるからである。だとすれば、サルトルは多少とも解決済みであるこの論点を再び持ち出すことによって、いったい何を論証しようというのであろうか。

じつは、フローベール論に新味があるとすれば、その新しさは文体論そのもののうちではなく、それが作家の個性との関係で分析されている点にある。言い換えれば、ここでも問題は文体と人間、あるいは「文体における人間」にあるのだ。細部に入ることはできないが、サルトルの主張を簡単に要約してみよう。論点は三つある。

一つは、全体化の道具としての文体である。サルトルは動詞、自由間接話法、その他のテーマを全体化という視点から分析しようと試みる。サルトルによれば、フローベールは人物を全体化の客体であると同時に主体でもあるものとして捉えようと試みていたというのだ。ひとつだけ例をあげれば、『ボヴァリー夫人』における有名な「私たち」とは、「全体化の外部」なのであり、それが外的な証言を示しているのである。のみならず、サルトルはこの小説そのものを内面性への全体化としての小説だと見なしている。それは、幻想が幻滅にとって代われ、死によって終わる（真理の瞬間）だからである。

第二は、想像的なものと現実的なものの循環性である。サルトルによれば、たとえフローベールのように「想像的な」存在であったとしても、ひとはその状態にとどまることはできない。そこから脱出する仕方は二つあり、ひとつは、想像したものを実現しようとする（これこそエンマがしたことだ）だが、その結果は「地獄」である。もうひとつは、想像した者を脱現実化の中心とすることであり、これこそフローベールが行ったことだった。すなわち芸術である。「書くことが、彼の人生の連続性を正当化する²¹⁾」とサルトルは言う。

20) *Ibid.*, 717.

21) *Ibid.*, 739.

第三は、言語と思考との矛盾ないしは乖離である。サルトルは言語がすべてを言いえないという点を執拗に強調する²²⁾。言い換えれば、言語と思考との間には必然的にずれが生じてしまうというのである。かくして、私たちは、サルトルが『文学とは何か』で表明された詩と散文の二分法をここにも見出すことになる。散文はコミュニケーションに属すが、詩はオブジェなのだ。しかし、ここにも新たな論点が見られる。それは文体の必要性である。

初期のサルトルは文体に関して、きわめて古典的なイメージを持っていた。つまり「よく書かれている」あるいは「美しい文章」にすぎなかった。しかし、晩年のインタビューでは、いくつかの変化が見られる。

私にとって文体というのは、——文体というのは単純さを排除するものではなく、まったく逆なのだが——第一に三つか四つのことを一つのことで言う仕方だ。単純な文があり、そこにはまずその直接的な意味が、ついでその下に、同時に、深みにおいて組織される異なるいくつかの意味がある。言語にこの意味の複数性を表現させえないなら書くには及ばない。

たとえば、文学が科学のコミュニケーションと違うのは、文学は一義的ではないからだ²³⁾。

かくして、文体とは、文章の一義性を逃れるものであり、それゆえ存在の一義性を逃れるものなのだ。このような変化とともに、アンガジュマンの内容も微妙に変容したことは興味深い。

重要なことは、フローベールがある面において徹底的に自分をアンガジェしたということだ。たとえそのために残りのすべての点について非難すべき態度をとったとしてもだ。文学的アンガジュマンとは結局のところ、世界全体を、全体性を引き受けるという行為だ。[略] 宇宙を、人間

22) *Ibid.* 670.

23) 『シチュアションX』(鈴木道彦他訳)、人文書院、1977年、p. 128。

をうちに含んだ一個の全体とみなし、無の観点からこれを叙述すること、これは奥深いアンガジュマンだ²⁴⁾。

四 思考と言語の矛盾的關係

ここからは、生前に発表された巻のなかでより具体的に文体論が展開されている部分を分析することにしよう。ひとつは、第二部「人格形成」の第三章「前神経症」の「文学的幻滅」の節である。ここでサルトルは、思考と言語との関係についての考察を全面的に展開する。それによれば、1838年から1840年にかけてはサルトルが「文学的幻滅」と呼ぶ時期だが、この頃ギュスターヴは三つのやり方で世界が地獄であることを示そうとしていた、とサルトルは指摘する。一つは、宇宙を内部で全体化することであり、第二は上空飛行によって外部で全体化することであり、第三は、具体的な独自性の内部において、存在の爆発的な矛盾と我々の幻想の虚しさを露わにすることである。しかし、当時執筆していた『スマール』の失敗によってフローベールは言語が有効でないことを発見する。彼は「〈芸術家〉の思考を表現するのは、その語ることでなく、語り方なのだ²⁵⁾」と理解する。サルトルは、フローベールの直接的な表現から、間接的な表現への移行を読み取るのだ。サルトルはフローベールが芸術を「形式による思考の奇妙な翻訳に他ならない」と考えていたことに注目する。ここで現れるのが文体である。じっさい、文体とはここでは物質と意図との奇妙な混合体だと規定される。

いかなる命題も、フローベールの〈夢想〉を表現することはできないのであり、それらをわれわれに伝達するのは、文体の仕事である²⁶⁾」

サルトルは1840年頃のフローベールにとっては二つの美が存在したと指摘

24) 同書、p. 106。

25) 『家の馬鹿息子』(鈴木道彦他訳)、第3巻、人文書院、2006年、p. 550。

26) 同書、五五一頁。

する。ひとつは主体の美（外部における全体性）であり、もうひとつは文体の美である。一方なしに他方はいないが、この時点ではまだ両者の弁証法的関係は認められていない。ところが、「スマール」の失敗によって、フローベールの思考は深みを増し、エクリチュールの美は絶対的な表現の方法になったのだ、とサルトルは考える。このような文脈のうちで、サルトルは、フローベールがルイーズ・コレに宛てて1852年1月16日に書いた手紙を引用する。

ぼくが美しいと思うもの、ぼくが創り出したいと思うもの、それは何について書かれたのでもない本です。ちょうど地球が支えもなしに空中に浮かんでいるように、外部とのつながりを持たず、文体の内面的な力によって保たれている本、できることならほとんど主題がない、あるいは少なくともほとんど主題が見えないような本です²⁷⁾。

このくだりを引用したのち、フローベールは自分の考えに確信がもてなかったのだらう、とサルトルはコメントする。フローベールの考えは、二つの対立しあう主張の間で揺れ動いているように見えるからだ。すなわち、一方で、文体こそが思考を生み出すとしながら、他方で、思考がその表現に先立つとしていいるからだ、とサルトルは分析する。このような思考と言語の関係はむしろサルトルその人にこそ当てはまるように思われるのだが、それはそれとして、フローベールはついには美的思考が文体のうちにしか、そして文体によってしか存在しないことを見出す。

かくして、『スマール』で失敗し、後に『ボヴァリー夫人』で成功することになる文体の問題を執拗に追っていった後に、サルトルは結論する。

彼の師ビュフォン流に言えば、文体は人なりなのである。つまりフローベールが断罪するのは彼自身なのだ。単に自分に天分が欠けていることを

27) 同書、p. 551。

認めるからではなく、ひとつの文を書くごとに、自分の個人的なヘクシスに苛立つためである。彼が一行記すや否や、たちまちそれは彼に、おしゃべりでがさつな田舎者か、または叙情的なマゾヒストの姿を映し出す。それは、彼がそうなることを選んだ存在、しかし彼をぞっとさせる存在なのだ²⁸⁾。

さらに、サルトルはフローベールにおける文体と思考の問題を、第四章「合理化された〈負けるが勝ち〉」で、今度は『初稿 感情教育』を分析することによって続ける。サルトルはフローベールの文体観を次のようにまとめる。

それは、その性質上、言われうることをより巧みに——より優雅に、より正確に——語るためではなく、全く逆に、定義上、言葉をすり抜けるものを、言葉のなんらかの用法によって固定するために、実践（*praxis*）から言説の分節（*articulations*）を取り戻すことをめざす、素材の独特の扱いのことである²⁹⁾。

かくして、サルトルは、フローベールにおいて、文体の問題は何よりもルサンチマンから生まれたものであり、「なによりもパロールの組織的な脱現実化なのだ³⁰⁾」と結論づける。

つまり、サルトルによれば、フローベールはたえず意義（*sens*）と意味（*signification*）の間で揺れているのだ。フローベールは、文体こそが「言語の非現実化作用によって言い表せないものを伝える」と考えているのだが、その理由をサルトルは、若きフローベールが自分を愛せずにしたためたと説明する。そして、個人主義者ではないにもかかわらず、ブルジョワ的個人主義の環

28) 同書、p. 561。

29) *L'Idiot de la famille*, Gallimard, 1971, t. II, p.1980.

30) *Ibid.*, p. 1984.

境に生きているためだ、と。「彼は異常のレットルで、ある種の根源的な非適応性を内面化することを強いられた。しかしこの異常は、伝達可能ではない。その理由は、それが何も語るべき事などない些少事であるからだ³¹⁾」。かくして、文体の問題は最終的に神経症の問題と結びつけられることになるのである。

その意味で、『家の馬鹿息子』が伝記という装いによってその意味ではなんともアナクロニクに見えとしても、その試みはけっして〈人と作品〉といったものではなかった。むしろ、新批評がもっぱら〈テキストから〉出発する批評であったのに対して、サルトルのフローバール論は〈テキストへ向けて〉の試みだったというべきだろう。

おわりに

ところで、ここまで見てきたようなものが文学における文体の問題であるとしたら、哲学にとって文体とはいったい何なのか。そこには違いがあるのだろうか。

『嘔吐』や『言葉』などの文学作品が執拗な推敲を経ているのに対して、サルトルの哲学作品の原稿はペンの流れのままにほとんど語句の削除なしに書かれている。この違いをサルトルは対象の違いからくと説明している。

哲学では、一つの文は一つの意味しか持つべきではない。たとえば、文に多様な重複した意味を与えようとして『言葉』で私がやった作業は、哲学では悪しき作業ということになる。(略) 文学はある意味で常に生体験に関係しており、この場合には、私の語ろうとすることは何ひとつとして、私が語ることによって完全に表現されはしない。同じひとつの現実が、事実上無限の仕方では表現されうる³²⁾。

31) *Ibid.*, p. 1988.

32) 『シチュアション X』前掲書、p. 89。

だとすれば、サルトル自身の文体観はある意味できわめて古典的だと言わねばなるまい。だが、この古典性は文体観だけではない。サルトルはジャンルについても小説 (roman)、物語 (récit)、エッセー、哲学などについて、まことに厳格に考えていたことは、最初に引用した初期の評論などからもうかがえることである。

ところが実際には、サルトルの作品はこのようなジャンルに当てはまらないものであるし、文体についても同じことが言えるのだ。たとえば、『嘔吐』は小説 (roman) と銘打たれているが、これはむしろ哲学的日記小説とでも呼ぶべきもので、およそサルトル自身が考えているような小説の範疇には入らない。また、哲学に関して言えば、『存在と無』の文体は、それまでの哲学書にはまったく見られなかったような、具体的な記述などを多く含んでいるのみならず、「人間は無用な情熱である」といったアフォリズム的な表現も少なくない。つまり、サルトルが標榜するような一義的文章からはほど遠いのであり、ことほどさように、サルトルの文体観と文体実践はかけ離れているのである。

付記

本論文の内容は、2010年5月に立教大学で行われた国際シンポジウム Flaubert Intersections でフランス語で行った口頭発表 « Le style est-il l'homme même ? — ce que Sartre analyse chez Flaubert » を出発点としている。その原稿はほぼそのまま『立教フランス文学』40号(2011)、p. 95-108に発表された。本論文はその日本語バージョンだと言えるが、今回訳出するにあたって、少なからぬ追補を行っていることをお断りする。また、引用に関しては既訳を変更した部分がある。

なお、本研究は日本学術振興会科研費 24520371 の助成を受けたことをここに記し、謝意を表します。

Qu'est-ce que le style pour un écrivain-philosophe? — le cas de Jean-Paul Sartre

NAO SAWADA

Le style est important pour un écrivain, cela va de soi, mais quant au philosophe, c'est moins évident : pendant longtemps la question du style ne se posait même pas en philosophie. Cependant avec Nietzsche la situation change, le style n'est plus considéré comme accessoire, mais comme essentiel à la pensée. Le cas de Sartre mériterait bien d'être étudié dans la mesure où il est à la fois écrivain et philosophe. Dans cette étude, nous allons donc passer en revue la question du style chez Sartre : mais moins son propre style que ses idées sur le style.

On dit très souvent que ce qui intéresse Sartre dans la littérature c'est moins le style que l'engagement, ce serait pourtant faux. Nous pouvons repérer de nombreux passages consacrés au style dans ses essais littéraires réunis dans *Situations I* ainsi que dans les *Carnets de la drôle de guerre*. Toutefois, le premier Sartre a une idée plutôt classique et banale sur le style : il ne s'agit que de la « belle langue ». Une évolution importante ne vient que dans ses derniers travaux et notamment dans *L'Idiot de la famille* qui est sans aucun doute l'ouvrage le moins connu, mais qui comporte, du point de vue du style, des remarques extrêmement intéressantes. C'est la raison pour laquelle, nous tâcherons de montrer à quel point la question du style et celle de l'homme se confondent inextricablement chez Sartre. En effet, ce dernier ouvrage est à la fois l'occasion d'approfondir la réflexion sur la littérature et le « style », entamée avant la guerre avec ses critiques littéraires et explorée dans *Qu'est-ce que la littérature ?* et celle de développer l'approche biographique commencée par le *Baudelaire*.